



福島  
から

## ブルーベリーの品種売りでファン獲得

渡邊紗恵子

スーパーなどに並ぶブルーベリーの多くは、収穫・選果作業の大変さから、いろいろな品種をいっしょくたに交ぜて販売されているそうです。だから、食べると甘いのもあれば酸っぱいのもある、ということになります。

喜多方市で20品種以上のブルーベリーを栽培する遠藤正彦さんは、その手間を惜しまずに、品種ごとに分けて販売しています。選果するときは、バットに緩衝材と新聞紙を敷き、ブルーベリーを広げたら、一粒ずつ色や粒張り、ガクの開きなどを見極めて丁寧パック詰め。おかげで食べたときに味が均一になり、品種の特徴を味わえます。「遠藤さんちのブルーベリーはおいしい」とお客さんもつくようになりました。農家でも「ブルーベリーごとの味」がわかっている人は少ないのでは？と遠藤さん。お気に

入りの品種は「サウスムーン」。すずなりで粒揃いもよく、ほどよい甘さがあるそうです。



岡山  
から

## モミガラくん炭培土なら苗箱の重さ半分以下

細田実生

新見市の菅農組合で、約30haの稲作とライスセンターを経営する組合長の小郷昌一さん。目下の関心事は、モミすりが出てくる大量のモミガラ活用法です。



今取り組んでいるのは、モミガラくん炭を使ったイネの育苗培土作り。モミガラを活用できて苗箱も軽くなるならと、10年ほど前から試作を始めました。一斗缶でくん炭10杯、土3杯、苗箱用肥料を1kgの比率で混ぜ、培土として播種機に投入します。

くん炭100%でも苗はしっかり育ったようですが、軽過ぎて播種機のホッパーからうまく落ちませんでした。試行錯誤してたどり着いたのがこの比率。培土の重さ自体は土の半分以下、くん炭が水をたっぷり吸ったときでも3分の2程度の重さで、根張りもよくなったといいます。今では年間約3000枚、15ha分の苗を、このくん炭培土でつくっています。

くん炭は他に畑にも使っていて、ダイズ畑の土壌改良に一役買っているそうです。



愛知  
から

## イナワラとEM菌で炭酸ガスを確保

青山和樹

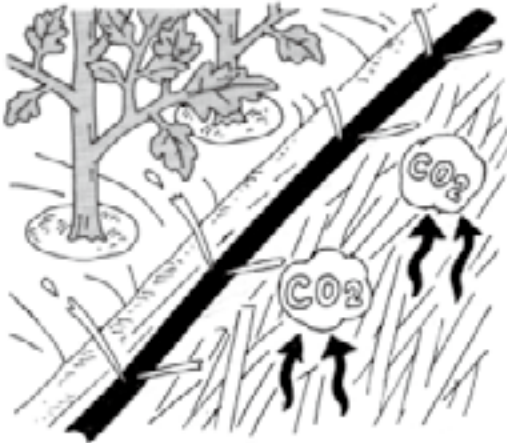
豊橋市の小柳津清悟おやいづさんは、ウネ間のイナワラで、ハウスのトマトの生育に十分な量の炭酸ガスを確保できたといいます。

イナワラは、土壌の乾燥を防ぎ、土着菌を殖やす効果があると聞いてから、イネ刈り後の田んぼで集めてきてハウスのウネ間に敷くようにしています。厚さ約3cm、地面が見えなくなるくらいの量です。かん水には自家培養したEM菌を混ぜています。

10年ほど前、炭酸ガス発生装置を導入しようとしたときに、ハウス内の二酸化炭素濃度を測定したところ、装置を導入する必要がないくらいの数値が出たそうです。どうやらイナワラにかかったEM菌が発酵を促進させた模様。「炭酸ガスを出そうと思ってやってたわけじゃないんだけど」と笑う小柳津さんは、現在も炭酸ガ

ス発生装置を導入していません。

この話を聞いたとき、「堆肥マルチに米ヌカふって炭酸ガスがモクモク発生」の記事(現21年5月号)のような話だと思いました。





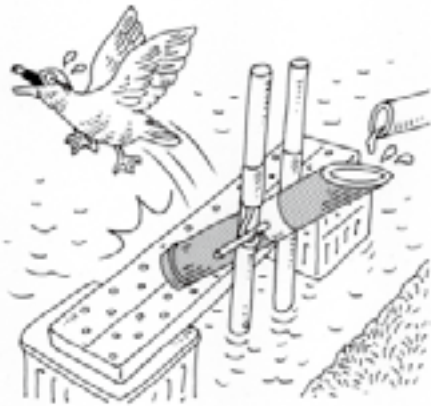
宮城  
から

## セリのカモ害に、カーンカーンとしおどし

櫻井 歓太郎

涌谷町で6aのセリを栽培する戸沢功さんは、冬のカモ害に頭を悩ませていました。カモもセリの根が美味しいことを知っているのです。収穫直前にやってきて水中に潜り、根っこごと食べてしまいます。張った水が凍らないよう、地下水をかけ流しにしているのですが、カモにとっても都合がいい。

なんとか撃退しようと、センサー式ライトなどを試してみても、すぐに慣れてしまいい、またもや「グワグワ」と……。試行錯誤した結果、裏山の竹を活用した、お手製の「ししおどし」が効果テキメンでした。



材料は、約60cmの長さに切った竹。中心から少し前よりの位置に穴をあけ、鉄棒を通したら、イボ竹支柱にU字に付けた番線に載せるだけ。カモが来る夕方、朝の間に、水口に設置しておきます。戸沢さんは鉄の歩み板を叩き石に

して、かん高く響く音が定期的に鳴り続けます。

このししおどしを一つ設置しただけですが、昨シーズンはカモはまったく来ませんでした。「そのうちカモも慣れるだろうから、気は抜けませんと戸沢さんは言いますが、鳥害に悩むみなさん、作目問わずぜひ試してみてくださいいかがでしょうか。



和歌山  
から

## 冷水で目洗い、老眼撃退

井上康生

かつらぎ町に住む船越幹司さんは、同年代の人と比べて目がいい。67歳になった今でも、老眼鏡をかけずに本を読んでいます。その秘訣



は、毎朝目を冷水で洗うこと。目を傷めないよう水圧を弱め、シャワーを直接、5秒ほど目にあてるのです。冷たい水で水晶体が刺激を受けるからか、毎日続けると老眼が進行しないのだと教えてくれました。

始めたのは40代の頃でした。近くのものが少し見えづらくなってきた、義理のお父さんに相談すると、「80歳を超えた知り合いが、毎日目を洗うことで老眼鏡をかけずに新聞を読んでいる」と教えてくれたそうです。なんでも、その人は戦争で中国に出兵し、上官から「歩兵は鉄砲の照準を合わせるのに目がよくないといけない。毎日冷水で目を洗うように」と指導されていたそうです。

船越さん、「『現代農業』も裸眼で読めるぞ」と、とても自慢げでした。